

9. 健康長寿センターにおける看護学部の活動

1) 看護学部の方針

健康長寿センターは、高知県立大学の関連学部が連携して、地域の人々の健康長寿の推進および健康長寿社会の構築に貢献する専門職者の知識や技術の向上に努めることを目的として設置されている。看護学部では、運営委員を中心に健康長寿センターの運営及び活動に参画し、他学部や地域教育研究センターの教員と連携して地域健康啓発研究活動を展開している。また、看護学部教員や領域、学部全体等の単位で健康長寿センター事業を実施することで、高知県内の看護その他保健医療福祉分野に係る人材育成と県民の健康づくりに貢献することを目指している。

センターの活動ポリシーである5領域【高知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動】【高知県民の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動】【高知医療センターとの包括的連携を推進する活動】【高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動】【高知県の健康長寿を研究する活動】を中心として、事業を展開してきた。

これらの事業の中でも「中山間地域等訪問看護師育成講座」、「退院支援体制推進事業」「糖尿病保健指導連携体制構築事業」は看護学部3事業として、3事業間の連携及び他の事業とのつながりも大切にしながら高知県民の医療・健康・福祉政策課題を解決および高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動を強化してきた。

本年度の新たな取り組みとしては、健康長寿体験型セミナーin津野町・高齢者対象健康教育「自分らしい暮らし」を開催した。この取り組みは、津野町との連携協定に基づき、津野町の住民の方々の健康とウェル・ビーイングの向上に資する活動の一環として実施したもので、津野町の高齢者が集う場（高齢者サロンやあったかふれあいセンター等：計10か所）に看護学部教員が同い、日頃の住民の様子を把握している町の保健師さんの強力なバックアップを頂き実現した。この取り組みは、次年度以降も継続して、今後は健康長寿センターの中核を担う事業に発展するものと期待している。

その他、ここ数年健康長寿センターとして力を入れてきた取り組みであるYouTube健康長寿体験型セミナーのコンテンツについては、昨年までに作成した学生も参加したコンテンツを健康教育の場に活用する取り組みへと展開した。その他、健康長寿センターにおける教育コンテンツは、可能な限り、講演者の許可を得て、継続して学べる仕組みを創るように工夫している。ぜひ、一度ご視聴頂きたい。<https://www.u-kochi.ac.jp/site/wlc/info-youtube01.html>

なお、本報は、健康長寿センターにおける看護学部の主な活動の要約の報告であるため、**各活動の詳細な内容は、「令和5年度健康長寿センター報告書」をご参照頂きたい。**

2) 高知県民の皆様に対し健康長寿を啓発する活動（地域共生）

(1) とさっ子健診プロジェクト

メンバー：佐東美緒、小林秀行、田之頭恵里、徳岡麻由

土佐市では、小中学生に対する健康調査の実施とその後の指導を通して、小中学生とその家族が成長後も健康的な生活を送れるよう、健康の改善を促すことを目的に、平成24年度からとさっ子健診を実施している。本プロジェクトは土佐市と本学との間の連携事業の一つとして行われている。

① とさっ子健診

健診は土佐市在住の小学5年生と中学2年生を対象として、夏に2日間、土佐市保健福祉センターで実施され、約100人の受診があった。お楽しみコーナーとしてメンバーが体操リーダーを

行ってスウェーデン体操の体験会を実施した。受診者のほか、きょうだいや保護者の参加もあった。

② 過去の健診データの分析

過去の実施分のデータを合わせて分析を行い、その結果を土佐市健康づくり課と共有を行った。肥満に加え痩身も多かったこと、朝食の欠食や夜更かしなどの生活習慣が肥満・痩身・血液データ（貧血・HbA_{1c}等）と関連することが示唆された。ただし、社会経済的状況の実態が明らかではないため、問題点を明らかにして対策を検討するには調査項目を充実させる必要性が考えられた。

③ 追跡調査の検討

上記のこれまでの分析結果を踏まえ、土佐市健康づくり課と打ち合わせを行い、追跡調査を実施して社会経済的状況と健診データとの関連を検討することになった。追跡調査は令和7年度春に実施する方向で準備を進めている。

④ 健診分析結果を踏まえた健診に関する普及啓発の検討

地域の子どもの健康を向上させる観点からは、健診の継続と受診率の向上が必要と考えられた。その対策として、健診分析結果に基づいて子どもや保護者に分かりやすい周知チラシを大学にて作成し、小中学校において健診の案内と合わせて配布して健診に関する普及啓発と受診率向上に用いることを令和6年度に計画している。

(2) 地域ケア会議推進プロジェクト

本プロジェクトは、高齢者の介護予防を促進するために土佐市が平成25年度後期より行っている「地域ケア会議」の効果的効率的な方法の確立を目的に、会議運営に関する助言、作成した会議に使用するアセスメント様式をもとに会議内容の課題分析の支援を行うものである。今年度も、看護学部2名の教員が計10回地域ケア会議に参加した。昨年度までは、週に1回実施されていたが、1昨年度からはモニタリングの充実を目的に2回/月の開催に変更となった（第1週に新規事例、第3週にモニタリング会議）。新規事例の開催から3か月後に同じアドバイザーが参加し、ケアマネジャーや事業所がアドバイスにどのように取り組み、どのような変化がみられ始めているのかを確認する方式に変更になっている。

検討事例は、循環器疾患や脳血管疾患を既往に持つ高齢者や認知症高齢者の事例が多い。そのため、看護アドバイザーには、加齢による身体変化、疾患や服薬による身体への影響、認知機能の面からのアドバイスが求められ、次年度も継続して参加する予定である。

(3) 津野町健康教育

メンバー：小林秀行、小原弘子、久保田聡美

【活動概要】高齢者が年老いていく中で、今の津野町での暮らしが自分にとっての健康的な暮らしであると再確認し、自分の生活について肯定的に表現できることを目標とした住民向け講演会を開催する。津野町内にて高齢住民を対象に定期的に開催されている高齢者サロンやあったかふれあいセンターの集いの場35か所のうち10カ所を選択し、各回90分で、高齢者にとっての健康ならびに自分らしい暮らしの意義についての講話、および住民相互の話し合いを実施した。

【活動成果】各回10～20名程度の近隣住民の参加があった。話し合いの時間には住民により活発に話し合いが展開され、住み慣れた地域での暮らしに関する意味付けがなされていた。津野町地域

包括支援センター保健師の担当者に毎回協力いただき、また、社会福祉協議会スタッフや民生委員の参加もあり、高齢者が集う場において働くスタッフや関係者と、高齢住民が住み続けていく上での課題について課題と情報を共有することができた。

【活動評価】参加住民は話し合いの中で、今の津野町での暮らしには個々に応じた多様な豊かさがあることを語り、肯定的に表現されていた。講演会の参加により津野町における生活の意義の再確認と、できる限り長く住み続けるための動機づけができたと考えられる。

3) 高知県の医療・健康・福祉政策課題を解決する活動

(1) 中山間地域等訪問看護師育成講座

① 事業概要

本講座は、平成27年度から高知県中山間地域等の訪問看護師の確保・育成・定着及び小規模訪問看護ステーションの機能強化を目的に、大学の教育力・学習環境を活かした「中山間地域等における新任・新卒訪問看護師育成プログラム」を開発し運用している。中山間地域等の訪問看護ステーション（以下訪問看護ST）と協働し、高知県、高知県看護協会、高知県訪問看護連絡協議会、高知県医師会、高知県社会福祉協議会、高知医療センターと共に新任・新卒訪問看護師育成に取り組み、新卒者15名を含む合計157名が修了し、在宅や医療機関等で活躍をしている。

② 事業成果

i. 訪問看護スタートアップ研修（35科目138時間・特別講義2科目）

年2回開催した。

【開催日時】前期：令和5年4月25日（火）～令和5年9月19日（火）

後期：令和5年10月3日（火）～令和5年12月21日（木）

【受講者】18名：新卒卒1名、中山間枠7名（スタンダード枠3名、サード枠4名）

全域枠10名（本年度は通年コースなし）

ii. 学習支援者研修会・検討会

新卒・新任者が所属する訪問看護STの学習支援者となる管理者等を対象に、学習支援に関する研修会・検討会を6回開催し、学習支援に必要な研修と課題や対処を検討した。

iii. 新卒および修了者フォローアップ研修

新卒者を対象に、フィジカルアセスメント研修を5回開催した。また、修了者にはフットケア、訪問看護の24時間体制と緊急時訪問、訪問看護に活かすPOCU、がん疼痛管理、ACPと看取り・エンゼルケア、複雑なニーズをもつ在宅療養者と家族の支援をテーマに7回開催した。ケースプレゼンテーションは13回実施し、コンサルテーションはキャリア等に関する7件の相談があった。また、公式ラインの登録者数を増やし修了者への案内に努めた。

iv. 保健所地域別の訪問看護推進ブロック会議

幡多、中央東、安芸福祉保健所管内の3ヶ所で開催し、各保健所管内の在宅医療・訪問看護の現状と課題を共有し、訪問看護師育成に関する課題や期待について意見交換を行った。

v. 参画団体による企画会議

関係協力団体による企画会議を2回開催し、新卒・新任訪問看護師育成の課題や対策、新卒や修了者のフォローアップ研修、新卒訪問看護師手技向上研修、中堅期研修、事業計画について協議し、高知県の訪問看護推進や人材育成における関係機関の役割について検討した。

③ 活動評価

今年度は感染症対策の緩和がされたが対面研修を中心に、オンラインとオンデマンドを受講者が柔軟に選択できるハイフレックス型を継続し、Web を活用した動画視聴など ICT を活用した学習支援を行った。令和 5 年度の本研修 (35 科目 157 項目) の学習目標の到達度を「とても思う」から「まったく思わない」までの 5 段階で評価した自己評価点の平均は 4.02 ± 0.8 (標準偏差) であった。また、新卒卒 1 名、中山間卒スタンダードコース 3 名の修了時の目指す姿および学習課題の自己評価は、ほぼ全員が「できた・まあまあできた」と捉えており、プログラムを活用して自信をもった単独訪問が可能となり、訪問看護 ST の一員としての役割を担い訪問看護に携わることができていた。なお、本講座の事業内容、実施体制、プログラムの詳細、事業評価については、本学健康長寿センター報告書に掲載している。

(2) 高知県介護職員喀痰吸引等研修

① 活動の概要

本事業は、平成 24 年 4 月 1 日から施行された介護職員等によるたんの吸引又は経管栄養(以下「たんの吸引等」という)の実施のための研修の制度化を受けて、居宅及び障害者支援施設等において必要なケアをより安全に提供するため、特定の者に対して適切にたんの吸引等を行うことができる介護職員等を養成することを目的としている。基本研修と現地で実際のたんの吸引等を指導する実地研修から構成される。

地域完結型医療の推進により、居宅や施設でたんの吸引等を実施できる介護職員等の養成の必要性は高まっている。本学では今年度基本研修を全 4 回開催した。

② 活動成果および評価

<活動成果>

基本研修は、講義研修(8 時間)と実技研修(1 時間)で構成されている。講義終了後に筆記試験を行い、90 点以上(100 点満点)の合格者に実技研修を行った。

結果、受講者 27 名中 22 名が筆記試験に合格し(合格率 81.5%)、シミュレーターを用いて喀痰吸引(鼻・口・気管切開部)と胃ろうからの栄養注入(液体栄養・半固形栄養)を実施、基本研修を修了できた。

<評価>

今年度は受講者がここ数年に比べ多かった(令和 4 年度 13 名、令和 3 年度 13 名)。受講者の所属施設も、訪問介護ステーション、共同作業所や放課後等児童デイサービスなど様々であり、幅広い年代の医療的ケアが必要な人々の支援につながっていると考える。

高知県は、介護人材の人手不足から、高齢者や外国人労働者など多様な背景を持つ方々の介護職への参入を促進している。このため、研修受講者の背景も多様化してきている。講義資料や説明内容など、受講者への伝わりやすさを意識して見直していく必要があると考える。

(3) 入退院支援事業

① 活動の概要

入退院支援事業は、中央西福祉保健所の依頼を受け平成 22 年度から地域病院協働型入退院システム構築に取り組んだ実績から発展し、平成 28 年度からは高知県の基金事業として位置づけられている事業である。

本事業は平成 28 年度に本学が策定した「地域・病院・多職種協働型の退院支援の仕組み作りガイドライン(以下、ガイドライン)」(ガイドラインは改定、洗練化を行っており、現在は Ver.3

である)の普及・啓発を推進するとともに、ガイドラインを活用して病院の入退院支援体制の構築及び、入退院支援・退院調整における院内の横断的な調整役を担う「相談支援事業」や地域のコーディネーターとなる人材育成や病院内外が協働する入退院支援を推進する管理者、看護管理者育成などの「研修事業」、および自施設で入退院支援体制の改善に取り組むことを目指す「モニタリング事業」の3事業を展開している。

② 活動成果及び評価

i. 高度急性期病院からの入退院支援システム構築

高知医療センターにおいて、可視化シートを用いて2事例について事例展開を行った。退院後にはケアマネジャーに聞き取りを行い、退院後の在宅生活の情報把握し、早期の地域スタッフとの協働の必要性について再確認し、次への支援につなぐことができた。あき総合病院では、コロナ感染拡大の影響により、事業開始や展開が大幅に遅れ事業に参加して3年が経過したが、今年度は、事例展開と振り返り会、モニタリング運営会議を開催し、可視化シートの洗練化に取り組んだ。

ii. 回復期病棟からの入退院支援システム構築

今年度は、新たなモデル基幹病院である高知病院、高知西病院において、ガイドラインに沿って、基盤整備、運営メンバーを選定し、地域包括支援センター、居宅介護支援専門員、病院の多職種が参加した運営メンバー会議で「優先課題」「目指す姿」を検討し、「入退院支援可視化シート」案の作成まで展開することができた。次年度、「入退院支援可視化シート」案について地域スタッフからの件を踏まえ、見直しをかけ、事例展開につなげ、システムの定着化を目指す。

昨年度開始した細木病院では、ステップ3である可視化シートを活用し地域・病院・多職種が協働する事例展開を積み重ねた。時系列に沿ってどのような支援や連携が必要なのかを丁寧に確認しながら進めた。その中で事例を決定し退院前カンファレンスや退院後訪問、振り返りを行った。

カンファレンスや退院前訪問を行う事により入院前の生活情報を地域・病院・多職種で共有し退院後での課題の抽出を行い、スムーズな退院に繋ぐことができた。

また、過去のモデル地域病院多職種協働型入退院システムモニタリングシート（以下、モニタリングシート）の活用の現状の把握と活用支援状況について情報収集を行った。また、モニタリング運営会議を6病院で実施し、入退院支援システムの発展拡充に向け、課題を明確にし、課題に解決に向けた相談支援を実施した。以上の活動より、効果的な活用方法について紹介するモニタリングシート活用マニュアルを作成し、webサイトに掲載した。

iii. 研修事業、報告会

研修会は感染予防対策を徹底しすべて対面型とし、予定通り実施することができ、県内61施設、述べ554人の参加があった。報告会は、ハイブリッド型で開催し、90人の参加があった。今後、録画画像をweb配信する予定である。

IV. 入退院支援体制のモニタリング

今年度はモニタリング運営会議を5病院に対して行った。モニタリング運営会議では、病院・地域スタッフが参加する事例検討やモニタリングシート結果の分析などを行い、地域・病院・多職種協働型退院支援システムの稼働状況について評価を行った。その中で、1病院においてコロナ感染拡大を受け、地域・病院・多職種協働型退院支援システムの稼働に課題が生じていることが明らかになった。そのため、3回の運営会議を開催し「目指す姿」「優先課題」を地域と共に再抽出

し、病院と地域がいつどのように協働していくのか具体的に検討し、可視化シートを修正するなど、入退院支援システムの再構築をつなげた。

V. 総合評価

相談支援事業、及び研修事業、モニタリング事業において、84施設、延べ1,145人と昨年以上の参加があった。相談支援事業・研修事業を継続して展開することにより、入院時から、地域・病院・多職種で切れ目のない円滑な移行を目指した「地域・病院・多職種協働」による入退院支援の体制づくりの必要性について県全体への周知に繋がっていると見える。また、過去のモデル基幹病院でのモニタリング運営会議、および大交流会の報告を通して、各医療機関等が様々な工夫に取り組み入退院支援システム改善を行うなど、入退院支援推進を病院主体で取り組む事例も多くなっている。このような継続的な支援の結果として、全国平均（回復期リハビリテーション病棟協会）を下回る平均在院日数の維持、重度な要介護者の自宅への復帰数の増加、CD研修修了生の院内での活動の再開・活性化などの成果が見られた。

以上より、高知県の地域包括ケアシステムの重要な構成要素である「在宅医療」・「介護連携」にも、寄与できたと考える。

(4) 糖尿病保健指導連携体制構築事業

令和元年度より高知県から委託を受け、「糖尿病保健指導連携体制構築事業」を開始した。本事業は、糖尿病の未治療者・治療中断者・重症化ハイリスク者に対して、院内多職種と地域の保険者・保健福祉機関・1次医療機関との連携・協働によって、継続的かつ効果的な治療と生活の両立支援を行う「血管病調整看護師」を育成し、その活動を支援するものである。

令和5年度は、第1期～第3期の13モデル病院のうち、参加10病院の血管病調整看護師を対象に、糖尿病重症化予防のOff-JTとして、合同説明会1回、スキルアップ研修会2回、合同事例検討会1回を開催した。またOJTとして、院内多職種チームの協働・連携推進とリスク層別化に応じた介入プログラム構築への支援を目的に、病院ごとにコンサルテーションや事例検討会を実施した。報告会では10モデル病院が活動報告を行う予定である。(表1参照)

令和5年度からモデル病院は糖尿病医療の院内多職種カンファレンスや教育入院・患者教室等を徐々に再開し始めた。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大後から血管病調整看護師の離職や部署異動が続いており、5類感染症への移行後は感染者数が増加すると現場の医療者数が減少するというシーソー関係が顕著になった。このため、多くのモデル病院が従来の糖尿病医療体制を本格稼働させるには未だ厳しい状況である。このような環境下でも、血管病調整看護師が組織的な活動を続けてきた病院では、糖尿病の未治療者・治療中断者・重症化ハイリスク者の発見が迅速になり、病院と地域における治療と生活の両立支援に向けた多職種連携のヒューマンネットワークが拡大している。

モデル病院を取り巻く環境や各組織の抱える事情によって、血管病調整看護師によるケア調整活動や連携体制構築の進捗状況は様々である。院内多職種だけでなく2次医療圏の市町村保険者との定期会議や勉強会を開催し始めた病院、また医療過疎地域を抱える2次医療圏では1次医療機関との循環型連携の定着を推進した病院など、取り組みが進捗する病院がみられた。一方で、2次医療圏の医療提供体制や病院看護職の組織体制・マンパワーなどの諸事情により、ハイリスク者へのケア調整活動や院内外の連携体制がなかなか進捗しない病院もみられた。前述のような取り組みが進捗している病院では、ハイリスク者の迅速な発見、多職種協働・連携によるフォローアップ、及び地域への移行支援やネットワーク拡大において大きな成果を上げており、県や市町村保険者から高い評価が得られ今後への期待も寄せられている。

次年度は、高知県より血管病調整看護師のフォローアップ事業が委託されるため、より一層の重症化予防ケアのスキルアップ、院内多職種の協働・連携体制の推進、及び地域連携の拡充に向けて、大学教員は OJT を継続していく。また、血管病調整看護師が県福祉保健所や市町村保険者とともに、地域連携の課題を明確化して効果的な改善策を見いだせるよう、大学は関係者間の調整支援を行っていく必要がある。(詳細は健康長寿センター報告書参照)

表1 令和5年度糖尿病連携体制構築事業

研修会	参加者
合同説明会	医療機関 21名 本学 8名
第1回スキルアップ研修会 「レベル別の効果的・効率的なケア調整の検討」	医療機関 36名 大学 7名
第2回スキルアップ研修会 「レベル別の効果的・効率的なケア調整の検討」	医療機関 36名 大学 6名
合同事例検討会	医療機関 28名 大学 7名
公開講座 「地域住民とともに 糖尿病の重症化を防ぐ！～先進地域の安芸に学ぼう～」	医療機関 66名 大学 8名
院内多職種チームの協働・連携推進および介入プログラム構築への支援 「コンサルテーション」 「院内（事例）検討会」 ※⑩、⑪新規研修生対象の院内事例検討会	①医療機関 3名 大学 3名 ②医療機関 3名 大学 2名 ③医療機関 9名 大学 2名 ④医療機関 1名 大学 2名 ⑤医療機関 2名 大学 2名 ⑥医療機関 4名 大学 2名 ⑦医療機関 3名 大学 4名 ⑧医療機関 8名 大学 4名 ⑨医療機関 6名 大学 4名 ⑩医療機関 4名 大学 4名 ⑪医療機関 5名 大学 3名 ⑫医療機関 6名 大学 3名 ⑬医療機関 3名 大学 3名 ⑭医療機関 2名 大学 3名 ⑮医療機関 3名 大学 3名 ⑯医療機関 6名 大学 4名 ⑰医療機関 5名 大学 4名
令和5年度高知県糖尿病保健指導連携体制構築事業報告会	医療機関及び保健所 58名 大学 8名

血管病調整看護師・育成研修会

開催場所・方法	開催日時
高知県立大学池キャンパス・Web開催	令和5年6月8日(木) 15:00~16:30
ちよテラホール・ハイブリッド開催	令和5年8月1日(火) 13:30~16:30
高知城ホール・ハイブリッド開催	令和5年9月4日(月) 13:30~16:30
高知城ホール・ハイブリッド開催	令和5年12月15日(金) 13:30~16:00
高知県立大学池キャンパス・ハイブリッド開催	令和6年2月10日(土) 13:30~15:00
①高知県立あき総合病院	①令和5年6月15日(木) 15:00~16:00
②高知赤十字病院	②令和5年7月27日(木) 10:00~10:45
③高知医療センター	③令和5年7月27日(木) 14:00~15:15
④高知大学医学部附属病院	④令和5年8月22日(火) 14:00~16:00
⑤高知高須病院	⑤令和5年8月23日(水) 15:00~16:00
⑥三愛病院	⑥令和5年8月24日(木) 14:00~16:00
⑦佐川町立高北健康保険病院・ハイブリッド開催	⑦令和5年8月28日(月) 14:00~15:15
⑧高知県立幡多けんみん病院・ハイブリッド開催	⑧令和5年8月29日(火) 15:00~16:00
⑨近森病院	⑨令和5年8月30日(水) 15:00~16:00
⑩くぼかわ病院・ハイブリッド開催	⑩令和5年9月26日(火) 14:00~15:30
⑪高知赤十字病院	⑪令和5年10月30日(月) 13:00~14:40
⑫幡多けんみん病院	⑫令和5年10月31日(火) 13:30~15:00
⑬近森病院・ハイブリッド開催	⑬令和5年11月2日(木) 9:30~11:30
⑭高知高須病院	⑭令和5年12月12日(火) 15:00~16:00
⑮高知大学医学部附属病院	⑮令和6年2月5日(月) 14:00~16:00
⑯三愛病院	⑯令和6年3月7日(木) 14:00~15:00 予定
⑰あき総合病院	⑰令和6年3月8日(金) 15:00~16:00 予定
高知城ホール・ハイブリッド開催	令和6年3月22日(金) 13:30~16:00

4) 高知県内の医療・健康・福祉専門職者のスキルアップに資する活動

(1) 高知県新任期保健師研修会

今年度も、高知県保健師人材育成ガイドライン Ver3.1 に沿って、新任期保健師の人材育成研修及び、プリセプター能力育成研修を行った。本研修の目的は、個別対応から地域の課題を捉えることを目的に、4年間のプログラムで取り組んでいる。今年は、感染対策による活動制限の影響もなく、1年目から4年目まで各2回の計8回、延べ人数277人を対象に対面による集合研修を行うことができた。また、福祉保健所ごとに行われるフォローアップ研修では、福祉保健所地域支援室と連携協働を図りながら、講義やコンサルテーションを行い、課題達成に向けた助言を行った。

研修を受講した新任期保健師は、プログラムへの参加をとおして、自身の保健師活動を振り返る機会となるとともに、必要な知識や援助方法をもとに保健活動の展開方法を学ぶ機会となった。

具体的には、3年目・4年目研修では、担当業務の活動体系を整理し、事業の位置づけや計画実施・評価の立案方法を習得し、マネジメントの考え方をを用いて自分の活動を整理し、PDCAで自分の活動を実施していくことに貢献できた。2年目研修では、「地区診断」をとおし、統計資料や実態調査、普段の地区活動から得られた情報をもとに自分の担当地域の健康課題を捉え、活動方針を提案した。地区診断と活動方針の提案までの過程と結果をポートフォリオにすることで、保健師同士のディスカッションが深まり、効果的な地区活動を展開していく能力の育成に貢献できた。ポートフォリオにすることは、自身の保健師としての活動の可視化を助けるとともに、次年度の保健活動の根拠にも、つなげることができたと考える。そして、1年目研修では、自身が経験する家庭訪問、健康相談（対面・電話）、関係者との連携などの場面を具体的に振り返り、自分のコミュニケーションの特徴をふまえた展開方法を具体的に検討することができた。また、情報収集や対象者への介入・援助関係の形成の点から、自身が経験したコミュニケーションを確認できたことで、日々の実践場面に具体的にいきる学びの機会を提供できたと考える。

実践者をとおして県民の健康課題の解決に貢献するためにも、今後も引き続き新任期保健師の人材育成に、関係機関と協働した参画ができるように努力するとともに、新たに今年度から取り組んだ中堅期保健師研修（前期）とを連動させながら、研修の成果を、プリセプターとしての能力向上にもつなげていけるよう取り組んでいきたい。

(2) 公開講座「フィジカルアセスメント研修」

県内の卒後3年目までの初心に戻ってフィジカルアセスメントをやり直したい看護師を対象に絞った少人数制の参加型の研修会を実施した。テーマは「フィジカルアセスメントについて見直してみよう」とし、研修は、講義（60分）、シミュレーターを使った技術練習（45分）、状況設定シミュレーション（60分）で構成された。

参加者は、15名であった。勤務されている病棟は、一般病棟、回復期リハビリテーション病棟、医療療養病棟など多様であった。参加者は、「初心に戻りフィジカルアセスメントをやり直すことで、臨床で確実に活かせるようにしたい」「フィジカルアセスメントが苦手だから少しでも苦手意識を無くしたい」「患者の状態変化にいち早く気付けるようになりたい」「心不全など生活習慣に左右される疾患のアセスメントができるようになりたい」などであった。

研修参加後のアンケートにて、参加者全員が「明日からの実践に役立ちそうである」と回答していた。このことから、研修参加者が勤務されている病棟は、一般病棟、回復期リハビリテーション病棟、医療療養病棟など多様であったにもかかわらず、参加者のニーズに合った研修内容であったと評価できる。「研修は満足できた」とほぼ全員が回答しており、自由記載において、技術演習によって理解度が向上する実感や、グループワークでの意見交換がよかったという感想があった。講義だけでなく、シミュレーターを使った技術練習および状況設定シミュレーションを組み合わ

せ、参加者同士の意見交換を多く取り入れた研修デザインによって、参加者の学びの実感や満足度を向上できたと評価できる。一方、「研修全体の時間配分（講義、実技演習、シミュレーショントレーニング）は適切だった」について、「まあまあそう思う」を4人が回答し、「シミュレーションがたっぷりできるとさらに良いと感じました。」という感想があったことから、次年度は、講義の時間を減らし、シミュレーターを使った技術練習および状況設定シミュレーションの時間を多くとる必要があるといえる。